



縄跳びの縄が切れたら…

(全校朝礼でのお話から)

◇三十年ほど前になりますが、こんな話が朝日新聞の「天声人語」に掲載されていました。

「天才少女」と言われたバイオリニスト、千住真理子さんは、今は慶応大学の哲学科を卒業し、さらに大輪の花を咲かせている。その千住さんが母校の幼稚舎の機関誌『仔馬』に「なわとびとバイオリン」という一文を寄せている。

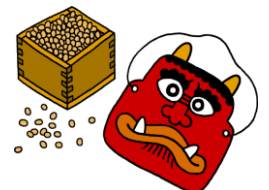
「何かができるようになるきっかけは、私たちのまわりにたくさんころがっているのよ。何でもいいの。何か自分でやってみたいなあというものがあったら、それができるまで、何十回でも何百回でも練習してみるの。できそうもないと思うことができるようになる。それはとてもとてもうれしいことなのよ。」千住さんはそう書いている。それを教えてくれたのは、幼稚舎時代の恩師、中山理先生だった。先生はみなに一本ずつ縄を配って縄跳びの練習をさせた。子どもたちは毎日、休み時間も放課後も、練習を重ねた。二重まわしや三重まわしに挑んでいると、縄の中央がすりへって、切れる。先生は言った。「一生懸命やる人の縄は切れる。そのかわりに必ず跳べるようになる」。



バイオリンの練習も同じだ。正しい方法で楽器を持ち、音を出す練習をくり返す。縄跳びの縄がすりへるように、弦をおさえる左手の指が弦の形にへっこんでくる。どうすれば、バイオリンのあの難しいところが上手になるかと苦しむたびに、千住さんは縄跳びの練習を思った。何十回も何百回も、同じ場所を練習するうちに、いつか指が楽に動いてきれいに曲がひけるようになる。千住さんは「大きな夢は、ごく小さい、つまらない身近な努力から実現する」という大切なことを、一本の縄から学んだ。縄が切れるたびに上手になる、という恩師の教えが自分の一生を左右するものになった、と書いている。

(千住真理子さんは、現在もバイオリニストとして世界で活躍されています。)

◇ごく小さな、つまらない身近な努力。それは、人によって学習であったり、運動であったり、それぞれ違うものでしょう。でも、自分がこれをやってみようと思ったことは、どんな小さなことでも積み重ねてみるのが大切です。努力は決して嘘をつきません。続けることで分かる世界、見える世界、できる世界がきっとあるはずです。そして、それは必ず自分を高めてくれるはずです。



(天声人語 続き) 慶応の創始者、福沢諭吉は言っている。

「敢為活発堅忍不屈の精神を以てするに非ざれば、独立自尊の主義を實にするを得ず。」
福翁はまた、自分には「出来難き事を好んで之を勤るの心」があった、と述懐している。